猟師と鹿
『シヴァ・プラーナ』からの物語に基づく話

あるシヴァラトゥリーの日、猟師が家族のために一日中獲物を探していました。何も見つからずに夕暮れとなり、朝から何も食べないまま、猟師は森の開けた所に木を見つけて、その枝で休みました。偶然にも、それはビルヴァの木でした。ビルヴァの葉はシヴァ神にささげられるものです。さらに偶然にも、木の下にはシヴァリンガム、すなわち形を持たない絶対なる神、シヴァを表す長円形のムールティがありました。猟師が木の上で休んでいると、ふとしたはずみに、水筒の水がリンガムの上に滴り落ちました。猟師が動くと、そのたびに、リンガムの上にビルヴァの葉が落ちました。こうして猟師は、知らない間に、シヴァ神にビルヴァの葉と水をささげ、教典に書かれている通りに礼拝をしていました。

数時間後、鹿がやって来ました。猟師が弓を構えると、いきなり鹿は話し始めました。「お願いです。私を射る前に、家族に別れを告げに行かせてください。この一つの願いを聞き入れてくださるなら、必ず戻って来て、この身をあなたとあなたの家族にささげます」。猟師のマインドは、偶然の祈りによってとても清められていました。生まれて初めて慈悲の心が湧き起こり、鹿を放してやることにしました。

数時間後、別の鹿が現れました。また猟師が狙いを定めると、この鹿も、「しばらく時間をください」と頼みました。「猟師さん、あなたが家族を養わなければならないのはわかっています。私の家族に別れを告げたら、必ず戻って来て、自分を食べ物としてささげると約束します」。猟師の心はこの時までにはさらに清められていたので、この鹿も放してやりました。数時間後に、また別の鹿が現れましたが、それもまた放してやりました。

夜明け前に、3頭の鹿は戻って来ました。皆、同じ家族で、猟師に食べ物として身をささげる約束を果たそうと一緒に戻って来た、と言うのです。しかし今や、猟師は礼拝とシヴァ神の恩恵によって浄化され、心が完全に開いていました。ですから、鹿を殺そうと考えていたことに慌てふためいて言いました。「命をささげようというあなたたちは、気高い生き物だ。それを殺そうとした私をどうか許してください」

猟師がその言葉を口にした途端、光輝くシヴァ神がリンガムから現れました。そして、言いました。「お前に満足した。心に真の慈悲が生まれたのだ。願いを一つかなえてあげよう」。猟師のマインドは、今や、神への愛ですっかり変容し、彼はただ、シヴァ神の足元にひれ伏して言いました。「私のマインドはすっかりあなたに夢中です。これ以上、欲しいものなどありません」

「ならば、お前に解放を授けよう。お前と私は一つである。この気づきの中で、生きていくだろう」。シヴァ神は続けて言いました。「お前の行いによって、今後、このシヴァラトゥリーの夜に行われる礼拝の功徳は、千倍となるだろう」

ビルヴァは、東南アジアに広く見られるインド原産の木で、細く高く伸び、良い香りを放つ。ビルヴァの三つ葉の楕円(だえん)形の葉は、古来よりシヴァ神の礼拝に使われている。そのため、ビルヴァの木はシヴァ神を祭った寺院のそばでよく見られる。

©2007, 2015 SYDA Foundation.® All rights reserved.
『シヴァ・プラーナ』からの物語の改作。